

うまいく FD プログラムには……

(独) 大学評価・学位授与機構評価研究部准教授

栗田佳代子 (くりた かよこ)

定刻間近になると何処からともなく一人二人と教員が集まってくる。廊下におかれたテーブルには、キャンパス内にある評判のカフェ COHO のサンドウィッチが3種類とサラダ、ホットとアイス両方の飲み物、それにクッキーまでが用意され、皆はなんとなく笑顔でゆったりと自分のランチプレートを選び会場に入ってゆく。Yang/Yamazaki Building は比較的新しい建物で、内部は白を基調としてガラスが多用されている。会場の教室は3階に位置しており特に明るい。壁は廊下側がガラス張り、この向かい側も吹き抜けに面したガラス張り、残りの二面は全面がホワイトボードになっているためだ。

定刻をまわるとランチョンセミナーの企画者である Center for Teaching and Learning (CTL) のダンバー教授がファシリテータとして、円形に並んだ座席に着席した参加者にむかって、その日のトピック「大学院所属の留学生への研究指導」についての説明と話題提供者の紹介を行う。20名ほどの参加者はランチをとりながら15分ほどの講演を聴き、その後30分近くにわたり議論を展開する。講演内容への意見や感想もあれば、自分の実践の紹介もある。それらがファシリテータの的確な進行によりテンポよく流れる。しかし、そこに流れる空気はいわゆる「白熱した」ものではなく、終始穏やかで「楽しいひととき」である。時間が来るとファシリテータが総括を行い参加者全員の拍手をもって終了し、それぞれ講義あ

るいは研究へ戻ってゆく。

私は、ファカルティ・ディベロップメントのためのプログラムおよびその効果的な提供方法についての研究を目的に、この2月まで1年間スタンフォード大学のCTLに在籍していました。CTLは学部生、大学院生、TA向けには発表技術をはじめとする教育研究スキルに関する科目やセミナーを開講し、教員向けには授業コンサルテーションを中心としたサービスプログラムの提供を行っています。私は在研中にこれらの多様なプログラムにふれてきましたが、とりわけ印象的だったのが上述のランチョンセミナーです。

ランチョンセミナーはほぼ月に一度学内のどこかで行われており、予約登録の必要もなく、教員であれば誰でも参加できます。話題提供者は予め依頼されることが多いようですが、パワーポイントなど資料の用意は必要なく、ディスカッションがセミナーの中心で「友人と雑談する」かのような気軽さで進行します。セミナーの開催時間をランチタイムに設定してあるため、食事を兼ねて参加できますから多忙な教員にとっても時間的な負担は大きくありません。参加人数は平均14、5名で多くとも25名を超えることはなく、ゼミ形式に組まれたテーブルでの議論に適したサイズを自然に保っています。

このセミナーの主たる目的はもちろん教員の教育力を高めることにあるわけですが、それとともに近傍の専門領域相互のネットワー



Profile — 栗田佳代子

2000年、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。2002年、博士(教育学、東京大学)取得。日本学術振興会特別研究員などを経て現職。専門は心理統計、FD、大学評価。主な著訳書は『大学評価文化の定着』(分担執筆、ぎょうせい)、『アカデミック・ポートフォリオ』(単訳、玉川大学出版部)など。

キングを促進するという目的ももっています。取り上げられるトピックに関心がある教員が多いと考えられる建物を会場にするのはそのためです。また、このセミナーの重要な仕掛けの一つは食べ物です。同じ空間において同じ食べ物をともに食しているとき、人の心にはおのずと余裕が生まれ、和やかな雰囲気が生まれます。この雰囲気こそがディスカッションの豊かさ、プログラムの豊かさに確実に貢献しています。

一方、日本ではこうしたFDプログラムや学会大会などのアカデミックな活動は食事とは完全に切り離されて考えられることが多く、食事への研究費の支出はかなり厳しく制限がかかっています。文化差といってしまうかもしれませんが、日本にも、たとえば、食事と空間の共有をすることの効果について示唆した「同じ釜の飯を食う」という表現があるのですから、この効果をアカデミックな観点から見直してみるといいのに、と思いつきの帰国でした。